



35°C

恣意セシル

唇を噛んでみます。

僕にその痛みはわかりません。

花卉を千切ってみます。

僕にそのはかなさはわかりません。

ただその一箇所だけが熱を持って、

僕にその存在を誇示します。

それは僕に打たれる君の眼差しに似ています。

それは僕に打ちのめされる君の哀しさに似ています。

僕ははじめてわかりました。

君を狂うほどに愛する意味が。

君を狂うほど傷つける僕の容（かたち）が。

僕はどうしてここにいるんだろう
君はどうして傷ついているんだろう

「だから、やめろって、言ったのに」

僕の声は届かなかったんだろう
君はどうして折れてしまわなかったのだろう

「それでも、それでも、君を」

タイプミスだらけの手紙のようです
僕たちは ちぐはぐ
食い違って
互いの傷を食い合って

そうやってしか生きられない化け物のように
しぶとく 一緒にいます

白夜

白い畏怖が目の前を遮る

近づく、のは

オレンジの暴力

僕は白夜を叫ぶ

君は孤独に犯されていく

白を切り裂けど切り裂けど止まない

赤の絶望

手を伸ばす方法なんて

と、君は笑う

僕が君を確かめれば確かめるほど

君は遠くへ離れていく

君の手を強く握れば

君は堪えきれずに薄れてく

明るい無神経の下

君が微かに呟く

僕はそれを理解する力を失って

永遠の白夜を走る

少女は夜に咲き急ぐ。

冷たい声に

頬をなぶる季節変わりの風に

いつまでもこのままじゃいられないと叫ぶ君に

私は腐った花を投げつけて

走って 走って 走った

眠ってしまった君の横顔があまりにも透明で

この足を受け止める地面の確かさが嘘みたいで

ずっと君のそばにいと笑う他人の笑顔が歪んで

私は顔を覆って

逃げる力も持てずに立ち尽くす

この世界で途方にくれて

それでも私の肺は酸素を欲し

心臓は動き続ける

それもまた希望の一つだと笑う誰かの声

私は笑顔を取り繕って

君の暖かい手の残酷さに無力を知る

うたかた

懐かしい匂いは零れていく
水玉のワンピースと
淡く汗をかいた首筋

笑った顔ほど君は切なくて
穏やかな涙は深い暗闇を映す

救い出せると信じてたの。

その言葉が僕の否定か肯定だったか
今はもう知る術もない

夕日が照らす足跡は眩しく僕の目を潰す
遠くへゆく、どうしてゆく。
僕は叫ぶ、きっと、君も。

さようなら、さようなら、
それはあまりにやわらかく控え目で
こんなになるまでその残酷さなんて知らずにいたんだ
空っぽのからだ、君がせき止めてた全ては流れ出し
さようなら、さようなら、
掻き抱くように力を込めても
それは光のように僕をすりぬけていく

エステファンの弔い

午後三時 丘の上

空には少しの雲 明日は晴れるだろう

鐘がひどく響いている

エステファンの不在を叫ぶように

丘への道 景色は色を失くし

鴉と馬と羊が並んで歩いている

赤い花と黒い大地と白い空

灰色はない 曖昧もない

つまりは君はもう いない

彼女はのろまだったな

名前に意味もなかった

僕が君を好きだと思ったのも

残酷な気まぐれでしかなかった

鐘が鳴っている

遠く近く 怯えるように

鴉と馬と羊はいつしかなくなった

僕は祈る対象を失くし

君の瞳の色も忘れようとしている

さようなら、エステファン。

愛してたよ、エステファン。

僕が殺してしまったエステファン。

救いのない大地で 安らかに眠れ。

瓦礫の依存

壊れていく

白くひび割れて

その隙間から

「愛しい」を少しずつ滲ませて

ソーダ水を飲み干した夜明け

視界の端にいた黒い虫がいなくなった

哀しい、は

泡になって弾けて消えた

そういえば君はここに痛んだっけね。

嘔いて どうしたらいい？

最後のかさぶたはまだ残っている

それが剥がれ落ちるのを待つ間に全ては過去になるだろう

最後の接吻（くちづけ）

あと もう少しだけ

あともう少しだけ、さよならに猶予を。

赤い花

落ちて。

落ちていくのだ。

無常の速度で。

眩暈よりも早く、眩むように。

空はくすんだオレンジ、

冷めた紅茶は植木にやろう。

怠惰な夕暮れと虚ろな朝焼け。

両者に違いはない。

いつも食い違っていたな。

君は赤い花が好きで、

僕は赤い花が嫌い。

いつも赤い花を咲かせたいと言っていたけれど、

その庭は薄暗く荒れ果てていた。

ねえ、僕たちは嵐の中を泳いでいたんだろうか。

世界の果てのようなイロゴト。

刹那的なクチヅケ。

絡まる肉に感情はない。

目も眩む速度で悲劇へひた走る僕たち。

君は唇から赤い血を流し、

僕の目は光を失う。

どこへも行かなければ良いの。

君はつぶやく。

そう、僕たちが僕たちを完全に閉じる事が出来れば

僕たちは幸せだったかな。

落ちて。

落ちていくのだ。

悲劇的な速度で、

絶望よりも陳腐な場所へ。

ああ、こんなときだ。

僕は目を閉じる。

こんなときこそ赤い花が咲けばいい。

悪趣味な赤い色で、満たしてくれればいい。

アカツキ

声を

聞いた

気がした

僕は手を伸ばす

遠い明け方に 光をまだ、覚えていた頃に

ゆるる髪を指で絡め取ってくちづけした

どこまでも直線で生きていけると思った

甘い水色の空 君の髪が揺れてた

いくつの空を越えたんだろう

遠くで赤いサンレンが鳴っている

朱鷺色の世界が減びていく世界を教えるみたいだ

僕はゆっくり 泳ぐみたいに子午線をまたぐ

暁に君はいない

果てまで。

海まで、あと2000メートル。

嘘ばかりのそれに、あたしは苦笑いする。

海は世界の果て、そんなに近いわけがない

絶え間ない繰り返しの中

あたしは狭い世界で^{いき}呼吸をする

この風のおいだけが

あたしの世界のおいだと

たとえばそれが桔梗の淡い紫色や

どこからかやってくる焚き火の香りをはらんでどこかへ流れていくのだとしても

あたしは自分の世界の狭さを疑わないのだ

走り出したいと願う、焦燥

そうしたらお終いだと戒める、理性

蹴散らして 蹴散らして

あたしは看板に背を向け 自転車を漕ぎ出す

海まで、あと2000メートル。